



| | |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title | 稻賀繁美編 『伝統工藝再考 過去発掘・現状分析・将来展望 京のうちそと』 思文閣出版 2007年7月25日 |
| Author(s) | 永井, 隆則 |
| Citation | デザイン理論. 2008, 52, p. 146-149 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53362 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

稻賀繁美編

『伝統工藝再考 過去発掘・現状分析・将来展望 京のうちそと』

思文閣出版 2007年7月25日

永井隆則／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科准教授

本書は、国際日本文化研究センターにおいて、平成15（2003）年4月より平成18年（2006）年8月まで、同センター教授で編者の中島繁美が主催した共同研究会「京都を中心とした伝統工芸、その過去・現在・将来」の成果を、題名を改めて市販化した報告書である。本書はまた、科学研究費補助金「基盤研究(B)工芸における伝統と革新：京都を中心とした職人産業の歴史的変遷と現状分析」（平成16年～18年）の成果の一環も成している。

本書は、京都の伝統工芸を学際的、国際的視座から、また、研究者集団の形成する学術性の殻を破壊して、作家、行政、商業・経営、流通といった現場からの発言を交えた脱学術的視座から、その過去、現在、未来を京都内外の「眼差し」から分析することを目指した意欲的著作である。

その構成は、

- 序章 「工芸」の脱構築のために——「伝統工芸」を再考するに先立ち——
- I 「伝統の諸相」～正倉院からユネスコ無形文化遺産まで～
- II 東西の往還～明治期・世纪末の輸出工芸～
- III モダニズム美学と装飾デザイン～二十世紀前半の工芸・美術・産業～
- IV 東アジア工芸の近代～工芸産業と海外進出の軌跡～
- V 美意識の相克と価値観の葛藤～思想運動としての工芸～
- VI 経営と流通の国際的変貌～アジアの生産現場瞥見～

VII 伝統工芸の現在～当事者の立場から～

VIII 将来への展望～行政施策の推移から二十世紀への提言～

終章 工芸の将来あるいは「ものづくり」再考

あとがき／研究会の経緯・活動記録／統計資料／参考文献／事項索引／人名索引／執筆者一覧

から成り、36篇の論考を収録、880頁（A5判上製）にも及ぶ大著である。

本書で言う「伝統工芸」とは、明治期欧米の美学が到来して以来、絵画、彫刻、建築から区別され、近代化、産業化の進行する中、機械製品から区別された「ものづくり全て」、換言すれば、美術とデザインの領域から二重に疎外された「手の造形全般」を指し、染織や陶芸といった特定のジャンルを越えた問題が俎上に載せられている。

本書を三つの現状認識に基づく三つの問題意識から生まれた、として以下で整理してみたい。

一つは、本来、開国まで、日本人の意識には存在していなかった、「工芸」というジャンル意識を出現させた、欧米の17世紀アカデミー成立以来の古典的美学並びに啓蒙主義以降の近代美学、さらには、これに依拠し誕生した、ロマン主義以降のモダニズム美学の終焉が自覚され共有されてきた今日、もはや古ぼけてしまった近代の枠組みを取り扱い歴史を逆流し、「伝統工芸」を脱構築する時が来ている、との現状認識から、「伝統工芸」とは何か？改めて問うことである。

もう一つは、テクノロジー、メディア時代

の現状を反省した上で、工藝の可能性を文明論的問う事である。18世紀末の産業革命によって、石炭、石油、天然ガスなどをエネルギー源に、太古からの水力、火力、風力、馬力、人力等を遙かに凌駕する、蒸気、電気という強力な動力が発明され、鉄鋼、ガラス産業の躍進、20世紀に入ると鉄筋コンクリートやプラスチックなどの化学加工品の開発に伴って、自然に代わって人工物が人間生活に溢れるようになった。手や手の延長としての道具による造形に代わって機械の造形が、人類の新たな可能性として模索され、蒸気機関車、飛行機、電気器具、自転車、自動車などの様々な機械製品が、デザインという人間活動として開発されてきた。レイナー・バンハムは、これを第1機械時代と呼んだ。戦後、核開発、原子力の平和利用や宇宙探索は、第2機械時代をもたらした。1980年代以降、電子媒体や光通信技術の開発に伴って、ファックス、PC、CD、CD-ROM、DVD、携帯電話、インターネットなどが飛躍的に普及し、昭和30年代から普及を始めたテレビは、ブラウン管から液晶、プラズマへと進化し、アナログに代わってデジタル時代が本格的に到来している。我々は、第3機械時代に生きている。従って、今日、伝統工藝を支える「手」の活動にどのような意味と価値があり得るか？本書は深く問い合わせる。とりわけ、論者の中でも、鈴木、西口が、機械に対抗する手を礼賛した、柳宗悦の思想を明快に解説して復活させ、大滝が、手仕事の倫理的、思想的意義を深く思索し、稻賀は冒頭でフォションの「手の礼賛」を引用、終章では宇宙時代のハイテクと情報化の現状を整理、その中でおもも機械ではなく手によってのみ実現される精度の高い「もの作り」の現場を紹介し、現代における手の可能性を主張する。逆に、龍村は、手仕事としての、伝統織物の手法に

現代のデジタル技術の起源が内在することを鮮やかに主張する事で、伝統工藝の今日性を主張する。

これらは、何れも興味深い論考ではあるが、彼等の力説する「五感」、ないしは、「勘」や「コツ」といった人間の身体活動のファジーな側面をテクノロジーによって実現しようとする、所謂、「感性デザイン」や「機械を人間化する」ロボット工学の進展する今日、手、機械と情報を最初から異質な物として対比する議論は、評者には、些か単純で古ぼけて見える。第3機械時代の今日、第1機械時代に生きたフォションと柳の議論を古典として讀える事に反対はしないが、それを復活させるだけでは不十分、時代錯誤であり、せめて、メルロ・ポンティーまで遡及して現代に相応しい身体論を構築し、それを踏まえた工藝論が展開されるべきではなかったか！ 美学・芸術論者による理論的裏付けがなされていない点が、本書を脆弱にしているのではないか、と心配する。

人間の生殖、繁殖すら人工的に可能となり、クローン技術や万能細胞の開発に加え、脳科学の発展は、人間感情や活動の全てを、脳内の神経伝達と物質反応に還元しかねない悪魔的時代の到来を間近にさせている。この様な時、本書で取り上げられている古くからの議論——身体の可能性——は、人間存在の尊厳という倫理的問題とも絡んで、今後も繰り返されることは、まず間違いない。

第三に、モダニズムと冷戦構造の終焉後、アメリカ合衆国対EU、資本主義国家対アメリカの言うテロ国家の新たな対立図式の成立、ロシア、中国、インドなどの新世界の台頭により、欧米中心の世界地図が書きかえられて来た現在、文学、美術史研究等に浸透してきた、ポスト・コロニアリズムの問題が、本書でも極めて現代的意識として共有されている

点に注目したい。第Ⅳ～V部では、戦争、オリエンタリズム、植民地主義、ナショナリズム、帝国主義と工藝が如何に絡み合って展開したかが解明され、新しい研究の眼差しが披露されている。とりわけ、西原、朴、閔の論考は秀逸である。

本書に込められた現状認識と問題意識を評者なりに整理する事で、本書を紹介してきたが、最後に、本書を読み切った後で見えてきた、難点を幾つか指摘したい。本書の問題意識、構成、ないしは、工藝の定義その物が、そもそも、近代以降の舶来品の域を出ていないのではないか、との疑惑が最後までつきまとった。勿論、欧米との交流が「工藝」という概念を作り上げ、本書で取り上げられた諸問題がまさしく欧米との関係の中で発生した事は明らかだ。しかし、工藝とは、論者の一人、樋田が持論としているように、そもそも、日本人ならではの様々な「生活感情が封印された」物であり、附言すれば、自然、風土、生活習慣、身のこなし（食事の作法や酒の呑み方など）、住環境、都市環境、芸能など様々な文化との関連、或いはその直中に棲息してきた「意匠」に他ならない。こうした言語化し難い工藝の意味が、本書では見事に切り捨てられている。

更に、工藝も生物と同じで、生き延びるために、環境の中で、創意工夫によって、生態を変えてきた。時代に相応しい工藝のあり方こそ、未来に向けて提言されねばならないはずだ。本書にはそれがない。衣食住の内、住環境だけみても、江戸末期や明治初期と現代では激変している。その中で普遍の工藝の姿を求めて、不毛である事は言うまでもない。無論、副題で唱われ、第Ⅳ部から第Ⅷ部まで、現状を分析し今後のあり方が検討されてはいるが、本書で念頭に置かれた「伝統工藝」が、上記の意味での環境から切り離されて議論さ

れ、文化財保護の理念から博物館の展示ケースに保管された標本的存在に見えてしまうのは、評者一人だけであろうか？

ともあれ、本書は、京都の地あって、日本文化を国際的視座から検討する国際日本文化研究センター、同じく、京都に相応しい出版活動を長年続けてきた思文閣出版の社会的使命を十二分に果たしている。京都ならびに伝統工藝を決して愛好化することなく、また、伝統工藝を京都の宣伝媒体とする事もなく、国際的、多角的、冷静に分析した功績は大きい。何よりも、質量とも爆発的な本書を構築された編者の力量に、衷心より敬意を表したい。

なお、本書に関心を持たれた方は、以下も合わせて一読されることをお勧めする。稻賀繁美・パトリシア・フィスター編『日本の伝統工藝再考 外から見た工藝の将来とその可能性（国際シンポジウム 第27集 2005）（国際シンポジウム 平成17年11月8日～12日、国際日本文化研究センター），国際日本文化研究センター発行、2007年9月3日。

